



Title	フランス語専攻学生の論証力測定の試み
Author(s)	和彗, 則明
Citation	大阪外国語大学論集. 1998, 19, p. 261-270
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79777
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フランス語専攻学生の論証力測定の試み

和 夢 則 明

UNE TENTATIVE POUR MESURER LE NIVEAU DE LA CAPACITÉ DE DÉMONSTRATION CHEZ LES ÉTUDIANTS

Noriaki WADA

はじめに

(1) 実施したテスト

(2) 問題の意図

(3) テスト結果の分析

結びにかえて

はじめに

平成3年5月17日の大学審議会の答申にもとづいて大学改革が実行されたが、その答申において今後の高等教育の課題としていくつかの点が指摘されている。ひとつは未知の分野を開拓していく創造性にあふれた人材を育成していくことであり、国際社会で活躍しうる人材を育成することである。これらは大学の教育的側面に関係する課題であろう。大学の研究面においては、国際的に高い評価を受けるような独創的、先端的な学術研究を推進することが課題として指摘されている。

それらの課題のうち創造性や独創性について考える場合、大学が学問・科学研究の場であることを前提とするならば、創造性や独創性はあくまでも科学や学問の本来の目的や目的を達成するための方法に適合的な創造性や独創性以外に考えられないし、私的な立場ではともかく、公的な立場としてはそれらの創造性や独創性以外のことについて語る資格や測定する能力は大学の教師にはないだろう。たとえば一芸にひいでていても、その一芸が学問や科学と密接に関係するものでなければ大学の教師にその一芸を評価する資格や能力は公的には存在しない。

科学や学問の目的は、だれでもが納得せざるをえない客観的真理の追求であり、その目的を達成する方法は、基本的には論証である。ある論証に対して他のだれからも反証や反論が生じないとき、その時点においてとりあえずその論証の結論は客観的真理、または最も客観的真理に近い仮説であるという認定がなされる。したがって論証がなければ、真理に至るプロセスを他の人間が検討することが不可能となり、反論や反証が不可能となり、特定の間人間または人間達のみが信じる主観的真理と客観的真理は区別がつかず、科学や学問はそれ以外の分野と識別できず、たとえば、宗教と識別できないことになる。

そのように考えるならば、創造性や独創性を生かすための基礎または基本的前提として論証力（論証するための論理力）の育成が不可欠であることがわかる。直観的ひらめきによるどれほど独創的な仮説があっても、個性的な創造性がどれだけあっても、自分の着想を明確なかたちで論証できなければ、学問や科学の成果とはならない。しかし、筆者のこれまでの20年近くの卒論指導や審査の経験では、大学生の論証力は本来的には決して十分なものではない。ゼミなどで指導すれば、学生によっては、それまでに比較して急速な変化を遂げる。

これまで、経験上漠然としたかたちで感じてきたそのような論証力の問題をよりはっきりさせるために平成9年11月25日に、担当授業に参加している学生を対象にあるテストを行なった。本稿はそのテストの実施結果に関する報告である。

（1）実施したテスト

問題・次の文章を読み、論理的におかしい点について最も重要である点から順に指摘しなさい。

♪さみしい時は男がわかる

笑顔で隠す男の涙

男は一人旅するものだ

ラララ・・・・・・

これが男の姿なら

私もつい あこがれてしまう

女は清くやさしく生きて

電車にのれば座席をゆずり

悲しい歌が聞こえてきたら

ほろりと涙流してしまう

ラララ・・・・・・

これが女の姿なら

私もつい あこがれてしまう（「あこがれ」井上陽水）

「あこがれ」は、思春期に色づきながら立ち現われる＜世界＞へのあこがれを歌ったものではない。そのことは、少し注意すれば誰にもわかる。五輪真弓の初期に「少女」という傑作があるが、「あたたかい陽のあたる真冬の縁側」で「夢」を見ながら座っていた少女が、ある日それが自分の内部で崩れたのを感じて、大人になることをひそかに受け入れる、というものだ。これは、ロマン的世界の崩壊あるいは喪失、という定型だが、「あこがれ」もまた、この定型に属しているのである。

だが、「あこがれ」がいかにも陽水的響きを刻印されたものであるのは、ここでロマンの喪失なる定型が、「私もつい あこがれてしまう」という最後の一句によって、極めて絶妙な形で成就されるという点に、よく示されている。

たとえば、次のような青春喪失のモチーフは、この定型がもっと＜物語＞化された形で現われているといつてよい。

♪やすらぎの 때가 青春ならば
 今こそ笑って 別れを言おう
 遥かな夢を捨てきれないままに
 熱い血潮は逆まく胸に・・・（「さらば青春の時」アリス）

♪これが青春時代の甘い心の痛みの音か
 何かが終わって そして何かが
 こわれて 落ちた！ あゝ（「青春時代」アリス）

ここで歌われている情感は、じつは青春の喪失や崩壊の体験とはべつに関係がない。この情感の定型は、自己哀惜と呼ぶべきものだ。

たとえば、母親がまだあどけない子供にむかって、「おお、かわいそうに、誰がお前をいじめたの、おお、かわいそうに」と呼びかけると、子供は、だんだん自分が哀れでいとおしくなり、しまいに涙を浮かべる。自己哀惜は、ふだんは働いている自己愛への規制、制限が、ふと解かれたときに生じる、小さな心的カタルシスである。この規制の解除は、基本的には他人による承認によって訪れ、ここでは母親の呼びかけが、規制の解かれたことを子供に告げるのである。

だからこういう歌は、大人にも子供にもあまりかわりなく、定型的情動をよび覚ます。ここでモチーフとして浮かんでいるのは、青春というロマン的世界の喪失だが、この喪失への、＜自己哀惜＞が、この曲の情緒をセンチメンタルなものにしているのである。

こういったロマン的定型に較べてみると、＜私もつい あこがれてしまう＞は、なんとも奇妙

な定型の閉じ方であることがわかる。この一句は、意味の上からは単に、一人雄々しく、しかも孤独に人生という「荒野」を進んでゆく男というイメージに、自分はおこがれる、と歌っているだけだ。だが、自分はこういう男のイメージに「おこがれてしまう」というフレーズは、こういったイメージが一般に若い男女にとっておこがれの対象であることを、歌い手はすでに知っているということを含意しているのである。

「私はそういう男におこがれてしまう」は、つまり、この「男性」像が一つの幻想にほかならぬことの対象化である。そしてそれが対象化（＝距離をとって見ること）であるからこそ、「おこがれ」は、自分はおもはやその幻想の内側で生きることはできない、というディスイリュージョンの自覚をもあやうく結んでいるわけだ。

しかし、ここまではよくある話である。たとえばサント・ブーヴはこう書いている。

仮面舞踏会に入っていくときにはすべてが目新しく見える。しかし、いずれはこの目くるめく色彩の群れすべてに向かって「美しい仮面よ、私はおまえを知っている。」と言い得る時が来るものだ。
(『婦人の肖像』)

このディスクールは、青春喪失というロマンティシズムではなく、むしろロマン的世界の挫折、を表していると見ることができる。＜世界＞の入り口に立っているときには、＜世界＞は、その奥底に恐るべき魅惑を秘めた、欲望の対象として現われている。だがいったんこの、＜世界＞を通過してみれば、わたしたちはそれが何であつたかを言うことができるわけだ。

この「通過」の経験は、そこを通過した大人にとっては、青年の＜世界を知りたい＞という渴望に対する貴重な解答であるように見えてくる。だから、大人の、「美しい仮面よ、私はおまえを知っている」は、彼が青年に対して優越感を持ってちらつかせたい＜真理＞のようなものになる。したがって、この＜真理＞がまた、大人の言説の欲望を強くそそるものとなるのだ。

つまり、青春の喪失を自己哀惜の形で歌うことが一つのロマン主義的定型であるとすれば、そこを通過したのちに、「美しい仮面よ、私はおまえを知っている」と苦虫を噛みつぶすのもまた、ロマン的世界の挫折という＜物語＞的定型になり得るのである。

しかし、陽水の「私もつい おこがれてしまう」は、こういった定型から微妙にズレている。すでに見たようにこの一句は、そこまで歌われて来た男と女の理想像が、おこがれの対象であり得ないことを告げ、そのことによって一つの幻想破壊をもたらす。だが、このロマンの喪失は、必ずしも通過したものの定型的欲望として歌われているわけではない。それは、一方でロマン的世界に距離をとるが、また「つい おこがれてしまう」ことによって、《自分はその世界を既に通りすぎてしまったが、それでもやはり、この「仮面舞踏会」の胸さわぎに満ちた予感の世界に、惹きつけられずにはいられない》、といった心情の機微をゆるやかに編み上げているのである。

(竹田青嗣『陽水の快楽』による)

（2）問題の意図

この文章を選んだひとつの理由は、主としてテストの対象となった学生が、「フランス文化研究入門2」という1，2年生向けの講義の受講者であるため、専門分野の分化がみられず、一般的な興味をひく文章を選ぶ必要があったことである。もうひとつより重要な理由があるが、それについては後述することになる。

文章の内容は、井上陽水の歌やアリスの歌など若い世代にも知られている可能性のある歌を例に引きながら論が展開されているという面では、難解ではないといえるが、使われている言葉には外来語を含む抽象的で定義が明確ではない言葉があり、その意味では学生にとっては論旨は必ずしもわかりやすいとはいえないだろう。

一般的に論証という視点から考えた場合、最も重大なミスは、論証に矛盾が含まれていることであろう。なぜなら、矛盾が含まれているときには、その矛盾に関係する論証の価値はゼロとなるからである。たとえば、論文の序論に述べていることと、結論で述べていることが矛盾しているときのことを考えると、部分的な矛盾の場合には、その部分的な矛盾の部分を除いたのこりの部分は論証として価値を持ちうるが、全体として矛盾している場合にはその論文の価値はゼロとなる。また、論証というのは、確率的に生じる問題の場合をのぞけば、単純化していえば、両立しえないすなわち矛盾するAか非Aのどちらかについて、すなわちある問題にかんして肯定か否定のどちらかについてその真偽について正しさを証明することであり、論証に入る前にAか非Aかについての選択判断がなされていなければならないだろう。その意味では、論証の中に両立し得ないAと非Aを含んでいるとき、それは論証とはいえず、論証の出発点にも立っていないことになる。

以上のことからいうと、自分の考えかたや書く文章の中に矛盾を含んでいないことは論証の不可欠の前提条件であり、その不可欠の前提条件を設定できる力は論証力の最も基礎的な力といえるだろう。

この文章の場合、矛盾という点からいうと二つ大きな問題を発見できる。まずその一つは、井上陽水の歌のあとの論述の冒頭の部分と論述の最後の部分の矛盾である。冒頭の部分で、著者は次のように書いている。

《「あこがれ」は、思春期に色づきながら立ち現われる＜世界＞へのあこがれを歌ったものではない。そのことは、すこし注意すれば誰にもわかる。》

わかりやすくするために、この文章以降の文章で五回使われている言葉で「思春期に色づきながら立ち現われる＜世界＞」を言い換えてみるとこの文章は次のようになる。

《「あこがれ」は、ロマン的世界へのあこがれを歌ったものではない。そのことはすこし注意すれば誰にもわかる。》

すこし注意すれば誰にもわかるのだから、文章の内容である否定は全面的な否定と考えられるだろう。だからそのことを含めてさらに文章を言い換えると次のようになる。

《「あこがれ」はロマン的世界へのあこがれを歌ったものでは決してない。》

冒頭にそのような内容の文章があるにもかかわらず、最後の部分においては次のような文章がある。

《・・・一方ではロマン的世界に距離をとるが、また「つい あこがれてしまう」ことによって、・・・・・・といった心情の機微をゆるやかに編み上げているのである。》

この文章では、「ロマン的世界に距離をとる」という条件つきであるが、結論としてはあこがれを歌っていることを肯定している。

冒頭の部分が全面的否定であるのだから、部分的肯定の余地はなく、したがって明らかな矛盾となる。もっとも、おそらく著者の意図としては、そのつもりではなかった可能性がある。冒頭の文章を次のように変えれば矛盾しないからである。

《「あこがれ」は、ロマン的世界への単純なあこがれを歌ったものではない。》

しかし、書かれている文章に限定した場合、すなわち示された論理のみに限定した場合には矛盾していることになる。少なくとも科学や学問の文章の場合には、書かれていることが全てであり、読み手による解釈の差が生じてはならないから、文章における矛盾は、その文章において解かれていないかぎり矛盾となる。しかも、この文章は内容的には引用した部分で完結しており、その中心的な趣旨において矛盾しているのだから、論理的な基準のみをとれば、この文章全体の価値はゼロとなる。ただし、文学的価値については別であろう。

もう一つの矛盾は、アリスの歌についての分析の中に見いだされる。アリスの歌を上げたすぐあとに次のように書かれている。

《ここで歌われている情感は、じつは青春の喪失や崩壊の体験とはべつに関係がない。》

テストの文章においては、青春とロマン的世界とは等価で言い換えられているから、この文章も次のように言い換えることができる。

《ここで歌われている情感は、じつは青春というロマン的世界の喪失や崩壊の体験とはべつに関係がない。》

ところが、自己愛惜についての説明のあとに同じアリスの歌についての次のような文章が出てくる。

《ここでモチーフとして浮かんでいるのは、青春というロマン的世界の喪失だが、この喪失への<自己愛惜>が、この曲の情緒をセンチメンタルなものにしているのである。》

モチーフであるから情感や情緒と関係がないことはありえず、ここでも、井上陽水の歌についての分析と同じように、先に否定されたものが後で肯定されるという矛盾がある。したがって、これらの矛盾について学生達がどのようにとらえるかを知ること、学生達の基礎的論証力を測定したいというのがテストの意図になる。最初に述べた冒頭部分と最後の部分の矛盾をB、二番目に述べた矛盾をAとすると、どちらの矛盾がより重要と考えられるかといえば論旨全体に関するBの方の矛盾であろう。しかし、どちらの矛盾が発見しやすいかという問題に関しては、簡単

な結論は出せない。矛盾する事があるについての文章間の物理的距離でいうとAの方がBより近く発見しやすいといえるが、A・Bともに言葉の言い換えがあることと、条件付き肯定であるため単純にはいえないだろう。

(3) テスト結果の分析

テストの対象として選んだのはすでに触れたように主として「フランス文化研究入門2」という1, 2年生向けの授業の受講生であるが、その授業以外に3, 4年生向けのゼミなどにおいても参考のために実施した。総人数でいうと、1, 2年生が49人であり、うち1年生が33人、2年生が16人である。3, 4年生については、授業の性格もあって合計13人となっている。また、全学年の合計では62人となる。

学生の所属でみると、62人のうち、昼間主の学生が38人、夜間主の学生が24人という内訳になり、専攻別にみると、同じく62人のうち56人がフランス語専攻関係、残り6人が他専攻関係となる。まず、1, 2年生全体についての結果は次のとおりである。

49人のうち

A・Bとも指摘した学生	0人	0%
Bのみ指摘した学生	10人	20.4%
Aのみ指摘した学生	5人	10.2%
合計	15人	30.6%

この場合のみではなく後のすべての場合において、Bの方を指摘した学生数の方がAの方を指摘した学生よりも上回っていることにがえる。結果からいえば、Bの方の矛盾の方が発見が容易であったようである。

所属別にわけてみると次のようになる。

昼間主32人のうちA, Bいずれかの答えを出した学生数

10人 31.3%

夜間主17人のうちA, Bいずれかの答えを出した学生数

5人 29.4%

夜間主の学生数が昼間主に比較して少ないためより強くかたよりが生じている可能性があるという意味で単純な比較はできない。しかし、より大規模なかたちで実施し、その結果と入学試験の成績や高校在学時の成績と比較した場合、一つの可能性として、論証力と公教育における学力

との正の相関関係が否定される可能性がないわけではない。その推論の一つの根拠となっているのは、これまでのゼミで取得知識量に依存しないテーマで議論したときの経験である。

3, 4 年生については、人数が相対的に少ないために参考になる程度である。

13人のうちなんらかの正解を出した人数

		4人	30.8%
その内訳は	A, B とも指摘	1人	7.7%
	Bのみ指摘	2人	15.4%
	Aのみ指摘	1人	7.7%

1, 2 年生においては一人もいなかった A, B 両方を指摘した学生が一人いることが注目される。この学生は、定職を有する社会人の学生である。したがって、その論証能力は学年によるものではない可能性がある。

以上の結果を合計したものが次のデータである。

総数62人のうち

A, B とも指摘した学生数	1人	1.6%
Bだけ指摘した学生数	12人	19.4%
Aだけ指摘した学生数	6人	9.7%
合計	19人	30.7%

この総計に関する30.7%という数値は、A, B いずれかの解答を論証力の基準とすれば 少なくともテスト対象とした学生達のうちで論証力を持っている学生の割合を近似的に示している可能性があるといえよう。

上のデータを男性、女性に分けてみると次のようになる。

男子学生17人のうちでいずれかの解答を出した学生数

5人 29.4%

女子学生45人のうちでいずれかの解答を出した学生数

14人 31.1%

男子学生の29.4%という数値はこれまでの卒論の成績と比較すれば上方に偏っているといえる。というのは、男子学生のなかで真の意味で評価 A の卒論を書いた学生の割合は約 5 %である

のに対して、女子学生のそれは約10%だからである。少なくとも卒論という結果だけを見るかぎりでは、論証力は女子学生の方が高い。

加えて、62人のうちでただ一人、A、B両方の矛盾を指摘した社会人学生も女性である。

結びにかえて

以上の分析結果がどこまで一般化できるのかはあくまでも未知数である。テストの対象は主としてフランス語専攻の学生であり、たとえば約30%という数値を外大全体に一般化できるのか、日本の大学生全体にまで広げられるのか、ということに関しては、上方または下方への偏りがある可能性があるということ以外何もいえない。また、この約30%という数値が高いのか低いのかということについても何もいえない。外国語に興味を持った学生であることや、文科系の学生であることから、理科系の学生よりも低いという仮説が立てられないことはないが、それも偏見である可能性が残されている。これまでの卒論指導の経験では、数学が比較的得意であった学生も含めて、論証に関する本格的トレーニングは高校までの教育においてほとんど受けていないと思われるからである。

ところで、今回のテスト問題は、平成6年度の大学入試センター試験の国語の問題において現代文の問題として実際出されたものである。国語の問題としての是非については、判断を差し控えるとしても、もし、これが今回実施したようなかたちで論理性を問う問題として出されていたならば、配点の基準によっては、合格者は大幅に入れ替わっていた可能性が出てくることになる。たとえば、A、Bともに指摘できた受験生を合格とした場合、現実の合格者の99%近くは順位が入れ代わり、実際のこの問題の配点と各人の得点のレベルによっては合格点に達しない場合が出てくる可能性がある。このことは、現在の受験学力と論証力の間の関係が正の相関関係から負の相関関係に移行するに対応して妥当するだろう。A、Bいずれかの場合を合格とした場合は現実の合格者の70%近くについて同じことがいえることになる。

逆に論証力のある受験生は、この問題に直面して文章の意味にとまどい意味をとるのに時間がかかり、あるときには意味がとれずこの問題の失点によって不合格になった可能性もゼロではない。実際、矛盾に気が付きそれにこだわるならこの文章は意味をとるのは不可能か容易ではないことになる。もしそれが現実的だとすれば、大学はそのような論証力のある学生を失ったことになるだろう。現在の受験学力と論証力の間に負の相関関係が成り立っている場合には、知識の記憶のみに頼る試験や、非論理的な内容の試験はそのような場合も含めて、すでに論証力をもっている学生やその可能性を持っている学生を排除している可能性がある。

平成三年の答申に明示された課題はおそらく、明治以後の日本の欧米との関係とそれに対応した教育のベクトルの基本的転換を示していると思われる。しかし、その転換は明治期における教育改革よりもはるかに困難である可能性がある。なぜなら、論証力に基礎をおいた科学的独創性の開発・育成は、制度的な意味での近代化ではなく、日本人の国民性そのものの近代化である可

能性があり、その意味でより根本的な近代化である可能性があるからである。欧米における論証力に基礎をおいた科学的独創性とその成果の社会的・歴史的・文化的基礎について考えるとき、経済的面ではともかく、精神的な面での欧米へのキャッチ・アップのプロセスはようやく開始されたばかりであるという解釈も成り立つだろう。しかも、そのプロセスの実現は経済的な意味では緊急性を有しているだろう。そのような歴史的状況において、最も有効な一つの方法は、入学試験の内容の変更である。受験生の論証力を測定しうるような試験への変更がそれである。ただ、問題が日本人の国民性の近代化に関係しているとすれば、外国人教師の問題作成への協力は不可欠となると思われる。なぜなら、国民性の変更を同じ国民性を持った人間が行なうのは不可能か困難であるからであり、また、これまでの教育のベクトルからの転換の度合いが大きいほど、これまでの教育の影響を受けた人間が新しい教育のベクトルを作るのは不可能か困難であるからである。